

輝翔館中等教育学校

「ICT機器と協同学習の手法を用いた主体的・対話的で深い学びの実践と評価方法の研究」

1 はじめに

昨年度は、「ICT機器を活用したアクティブ・ラーニング（以下AL）による指導法の深化と評価法の研究」をテーマとして研究を進めてきた。本校はICT機器が充実しており、アドバイザーの久留米大学文学部教授安永悟先生の御指導の下、AL型授業への移行もスムーズに行うことができ、授業改善については大方の目的は達成できたと考えられる。評価方法については昨年度から研究を進めてきたが、明確な成果は出ておらず、継続した研究が必要であると考えた。

本年度は引き続き、ICT機器と協同学習の手法を用いることで学習効果の上がる授業方法の模索を行いながら、単元を見通した評価規準を作成し生徒に提示するなど評価方法の在り方についても研究を進めてきた。

2 ICT機器とAL導入期

本校は平成26年から3年間「福岡県ICT活用教育研究事業」の研究指定を受けたこともあり、ICT機器が充実している。すべての前期課程普通教室に液晶型ディスプレイが、またすべての後期課程普通教室に黒板に投影できる固定式プロジェクターが設置されている。また、Windowsタブレットが120台導入されている。



資料1 「前期課程普通教室と後期課程普通教室の電子黒板・プロジェクターの設置風景」

ICT機器導入当初は使用者が機械に不慣れなことによる機材トラブルや機械そのものの不具合も多かったが、「とにかく使い続けよう」を合言葉にICT支援委員の力を借りながらなんとか軌道に乗せることができた。はじめはコンピュータの得意な一部の教師の取組であったが、職員室での会話や授業参観週間を通してICT機器を活用した授業への関心が多く多くの教師に広まり、平成27年7月の時点では

全体で 60.8%だった I C T 機器の活用率が 1 年後の調査では全体で 75.6%、前期課程の授業に限っては 85.9%まで上昇した。

平成 28 年度からは「福岡県立学校『新たな学びプロジェクト』」の研究指定を受け、A L の導入が始まった。久留米大学の安永悟教授をアドバイザーにお迎えし、年間 3 回の御教示をいただいた。充実した I C T 機器を活用しながら、A L を実践するにはどうしたらよいか、手探りながらも大きな手応えを感じていた。I C T 機器の導入の時と同様に職員間の情報交換、相互授業参観などを通して、はじめは A L に関心がなかった教師たちも、若い教師の取組や A L を取り入れた授業での生徒の生き生きとした様子に触発され、徐々に関心が高まっていった。本校職員のチームワークの良さ、年齢に関係なく良い実践を認め合う雰囲気や I C T 機器や A L の手法を用いた授業の普及におおいに役立ったといえる。

3 本年度の取組

(1) 新転任者および希望者を対象に A L 研修会を実施 (4 月)

本校における A L 実践例の紹介と協同学習の基本について紹介した。

(2) 各教科で A L の観点による指導目標等を作成 (4 月)

教科の研究テーマ、研修担当係、公開授業担当者を決定した。

(3) 指導目標に基づいた研究授業の実施 (6 月～2 月)

(4) 校内授業参観 (6 月、11 月、各 2 週間)

(5) 「新たな学びプロジェクト」に係る校内職員研修① (6 月)

指導者：久留米大学文学部 安永悟教授 (本校アドバイザー)

内容は以下の通り。

- ・今年度のプロジェクトテーマの確認 (研修主任)
- ・ワークショップ (安永教授)
- ・教科別リフレクション
- ・質疑応答

研修時間内に教科ごとに集まり、ワークショップで学んだことを各教科でどのように取り入れることができるか話し合う時間を設け、その後に質疑応答を行ったことで非常に充実した研修となった。

(6) 授業アンケートの実施 (6 月、11 月)

昨年度から A L に関する質問項目を導入している。質問は以下の通り。

- ・授業中にしっかりと考えるようになりましたか。
- ・自分の考えを以前に比べて書いたり発表したりできるようになりましたか。
- ・勉強の仕方について考えたり、学んだことを振り返る機会が増えましたか。

(7) 「新たな学びプロジェクト」に係る校内職員研修② (11 月)

内容は以下の通り。

テーマ：「地区版実践発表会にむけて」

- ・公開授業指導案を教科別に検討。
- ・教科の枠を超えたグループを作り、他教科の指導案を検討。

指導案作成の時点で他教科の視点が入ることで、内容が深まり、互いに学ぶこ

とが多く、良い試みだった。

(8) 地区版実践発表会 (12月)

ア 内容：実践発表、公開授業、研究協議、ポスター発表、講演 (安永悟教授)

イ 参加校：第9学区、第10学区県立高等学校、県立中学校

ウ 公開授業実施教科：国語 (国語総合)、数学 (数学B)、地歴 (日本史B)、理科 (中学1年)、保健体育 (中学3年)、英語 (中学1年、コミュニケーション英語I)

エ 研究協議

協議のテーマは以下の通り

- ①授業者自評、②意見交換、③ALに関する各校の取組についての情報交換、④その他 (質疑応答・意見交換・今後のアイデア)

(9) 「新たな学びプロジェクト」に関する職員・生徒アンケート (1月)

4 生徒・職員アンケートについて

アンケート結果をもとにICT機器の活用と協同学習、評価について考察する。

(1) ICT機器について

ア アンケート結果

Q：電子黒板やタブレットを使った学習はわかりやすいですか。(生徒)

わかりやすい	ややわかりやすい	ややわかりにくい	わかりにくい
46.8%	46.9%	5.6%	0.7%

Q：タブレットの操作についてどう思いますか。(生徒)

簡単だ	やや簡単だ	やや難しい	難しい
50.3%	34%	12.9%	2.8%

Q：ICT機器を活用する際の問題点は何ですか。(職員・自由記述)

- ・処理速度が遅く、作業が進まない (タブレットPC)。
- ・機械の経年劣化に伴い不具合が多くなった (ICT機器全般)。
- ・使えるアプリケーションソフトに制限がある。使いたいアプリケーションソフトが校務用PCでは使用できない。
- ・生徒のタイピング速度が遅く、作業に時間がかかる。
- ・電子黒板の位置が低く座席によっては見えにくい。
- ・電子黒板、黒板投影型プロジェクターともに、日光の状態によっては画面への映り込みや、照度不足によって見づらいことが多い (特に午前中)。
- ・使用中にアップデートが始まり、作業が中断することがある (タブレットPC)。
- ・問題が起きた時に自分の知識だけでは解決できない。常駐のICT支援委員が必要。

イ 考察

多くの生徒が電子黒板やタブレット等のICT機器を用いた授業をわかりや

すいと感じていることがわかる。一方で、タブレットの操作については苦手意識を感じている生徒も一定数おり、配慮が必要であることがわかる。また、職員のアンケートにあるように、文書の入力については慣れが必要であると思われる。本校では毎年4月に生徒向けのICT機器研修をICT支援員と共に行っているが、タイピング能力の向上など学年に状況に応じて内容を充実させる必要があるとわかった。

2018年の国際学習到達度調査(PISA)によると学校の授業でデジタル機器を利用する時間がOECD加盟の31カ国の中で最も低かった。また、毎日あるいはほぼ毎日コンピュータを使って宿題をする割合はOECD平均が22.2%だったのに対し、日本は3%だった。将来的には大学入試等もコンピュータを用いたテスト(CBT)に変更になる可能性があり、コンピュータの操作やキーボード入力による文書作成に慣れる必要がある。

(2) ALについて

ア アンケート結果

Q：AL型の授業はわかりやすいと思いますか。（生徒）

わかりやすい	ややわかりやすい	ややわかりにくい	わかりにくい
50.2%	45.1%	4%	0.7%

Q：AL型の授業では、授業中にしっかり考えることができますか。

できる	ややできる	ややできない	できない
43.5%	52.3%	3.5%	0.7%

Q：AL型の授業は、他の人の意見から気づくことが多いと思いますか。

多いと思う	やや多いと思う	やや少ないと思う	少ないと思う
55.6%	37.8%	5.9%	0.7%

Q：自分の考えを他人に説明したり、文章に書いたりするのは好きですか。

好き	やや好き	やや嫌い	嫌い
9.9%	35.2%	42.5%	12.4%

Q：説明文や感想文を書くことをどう思いますか。

難しくない	やや難しいが書ける	難しい	とても難しい
12.4%	55.4%	27%	5.2%

Q：ALを行う時に工夫していること、気を付けていることはどんなことですか。

（職員。自由記述）

- ・聴く人は話をする人の方に体を向けて、しっかり話し手を見ながら聞くことを徹底している。
- ・難しい課題の中にも楽しんでやれる要素を入れる。

- ・一問一答ではなく、考えを深める問いかけをして、周りの人と交流したくなるような問いかけを行う。
- ・意見が出やすい課題設定をする。
- ・マンネリ化しないように、発問の内容やバリエーションを増やしたり、変化させたりする。グループのメンバー構成は毎回変える。
- ・男女の数や積極性を考慮してグループ分けを行う。
- ・発表者やグループリーダーが偏らないようにする。
- ・グループ活動では、人任せにならないように、各自の役割を明確にしてから始める。
- ・意見交流の前に個人で考える時間を十分に与える。
- ・全体での共有とその後の個人の整理（ふりかえり）の時間を必ず確保する。
- ・活動の際はめあてや手順をはっきりと示す。
- ・各グループの実験結果や考察を全体で共有できる場面を必ず作る。

Q：ALで困っていることや問題点はどんなことですか。（職員・自由記述）

- ・積極的に考えている生徒とそうでない生徒の差がある。
- ・議論と関係ない話をするグループが出る。
- ・発問や活動の設定が難しい。
- ・設備が乏しくやりたい活動ができない。
- ・自分が入れている活動が本当に効果のあることなのか不安。
- ・他校の実践例をもっと知りたい。

イ 考察

AL型授業に対する生徒の評価は概ね良い。自分の意見を話したり、書いたりすることについては苦手と感じる生徒は低学年に多く、授業で繰り返し話したり、書いたりする活動を通して次第に慣れていくものと思われる。

一方で教師側はALに創意工夫を凝らしながらも課題も発見しており、今後多くの実践に触れることで更に授業改善が行われるように情報提供や研修の機会を提供していく必要があると考える。

(3) 評価について

ア アンケート結果

Q：評価についての実践していることを教えてください。（職員・自由記述）

- ・実技（体育）の授業では、事前に評価規準を示すようにしている。
- ・評価方法・項目、到達目標を明確に示すように心がけている。
- ・授業の終わりにふりかえりの時間を設け、用紙を提出させている。提出された用紙にコメントを書いて返している。

Q：評価についての問題点は何かと思いますか。（職員・自由記述）

- ・生徒の自己評価をどの程度教師の評価の中に取り入れていいものかわからない。
- ・関心・意欲・態度を評価する方法があるとは思えないし、人の内面を評価することが正しいことだとも思えない。
- ・各単元のルーブリックを作成するのが理想なのはわかるが実践できていない。

イ 考察

高等学校学習指導要領解説総則編（平成30年7月）第1章総説第1節2改訂の基本方針（3）「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進の中で、単元全体を見据えて授業計画を立てることが求められている。このため、評価も単元を通しての評価規準を定めることが適切であると考えられる。別添の学習指導案のように単元の評価規準を生徒に明確に提示した上で授業を行うべきだが、全ての教科等の実施まではできていない。今後、観点別評価に合わせて評価規準の提示が行われていくようにしなければならないし、そのために研修の場を提供していきたいと考える。

5 授業以外の教育活動への応用

本校では授業で培った「新たな学び」の手法を授業外の様々な活動にも応用している。ここではその一部を紹介する。

（1）ルーブリックを用いた、体育大会演技種目、合唱コンクールの評価

体育大会の応援合戦のような採点競技や合唱コンクール、スピーチコンテストでは審査員の評価によって勝敗が決まる。本校ではルーブリックを事前に生徒に提示し、ルーブリックの評価規準に基づいて評価することにより、曖昧な評価規準ではなく、誰が評価しても大きなブレが生じないように工夫をしている。

昨年度の報告書ではスピーチコンテストのルーブリックを紹介したが、本年度は合唱コンクールのルーブリックを紹介する。

合唱コンクール評価(ルーブリック)								
学年・組()				評価者()				
評価規準	7点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	小計
歌唱・表現	以下の全てを行っている	以下のうち6点を行っている	以下のうち5点を行っている	以下のうち4点を行っている	以下のうち3点を行っている	以下のうち2点を行っている	以下のうち1点を行っている	/7
	<input type="checkbox"/> ロが大きく開いている。 <input type="checkbox"/> 言葉の発音が明瞭で、歌詞がしっかりと伝わっている。 <input type="checkbox"/> 声量が十分出ている。 <input type="checkbox"/> 音を外さずに歌うことができている。 <input type="checkbox"/> ソプラノ・アルト・テノール、3パートの声のしっかりと聞こえる。 <input type="checkbox"/> 合唱の中で強弱の表現・変化が十分にある。 <input type="checkbox"/> 全体として、美しいハーモニーで、感銘を受ける合唱である。							
立ち振る舞い					3点	2点	1点	小計
					以下の全てを行っている	以下のうち2点を行っている	以下のうち1点を行っている	/3
							合計	/10

資料2 合唱コンクール評価用紙（ルーブリック）

(2) 対話を多く取り入れた委員会活動

従来の委員会活動は各クラスの委員が集まって話し合いをすることが活動の主体であったが、本年度から、はじめの15分間はクラスで各委員会の当月の反省と来月の目標、具体的取組等について話し合い、その後各委員が委員会ごとの会場に移動し、話し合ったことを発表し、今後の活動方針を決めるという形に変更した。委員だけが集まって話をするのではなく、クラスの全員で学校生活に関する問題について話し合い、そこで挙げた事柄を委員会に持ち寄ることで生徒全員が当事者意識をもつことができる活動へと変わった。

(3) A Lの手法を用いた部活動

部活動でもA Lの手法を応用されている。以下、いくつかの実践例を紹介する。

- ・顧問がすぐに問題点や解決策を指摘するのではなく、個人や集団で課題の発見や解決策、改善方法を考えさせる。
- ・各個人に課題を設定させ、その解決方法を研究しミーティングで発表させる。
- ・練習や試合をタブレットで撮影しそれを全員で見ながら、問題点を指摘、改善方法等を話し合わせる。
- ・いくつかの練習内容を顧問がグループリーダーに教え、その後リーダー役の生徒がジグソー法で教え合う。

6 まとめ

本校が『福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」』の研究指定校となって4年目が終わろうとしている。最初は手探りで始めた取組であったが、本校アドバイザーである安永悟教授の御指導の下、なんとか進めることができた。

この4年間で、授業中の風景も大きく変わった。ICT機器やA L導入以前は教師が黒板の前で話し、生徒は黙って聞いてノートを取るだけだった。班を作って話をさせようとしても黙って下を向いていた。その生徒たちも今では活発に話をし、時には授業が終わったあとの休み時間や放課後にも授業で扱った内容について話をしている。職員間でも、授業で取り入れている活動や授業の進め方に関する話題が増え、中堅・ベテラン教師が若手教師の創意工夫に刺激を受けて授業改善に取り組み始めた。「仲間と共有した目標の達成に向け、仲間と心と力を合わせて仲間と自分のために真剣に学ぶ姿（教え合い・学び合い・励まし合い）」という安永教授の提唱する「協同の姿勢」は生徒の間だけでなく、職員間にもしっかりと根ざしているといえる。

また、今回の報告にも挙げたが、授業だけでなく様々な学校活動においてICT機器を活用したり、A Lの手法を用いたりすることで教育効果を上げている。生徒が授業中だけでなく、学校生活のあらゆる時間に「主体的・対話的で深い学び」を実現できる土壌が出来つつあることは本校の強みであると考えられる。まだまだ解決すべき課題は多いが職員一丸となって取り組んでいきたい。

外国語（英語）科学習指導案

学校名 福岡県立輝翔館中等教育学校
指導者 教諭 梶原 雄一
実施日時 12月13日 金曜日 3時限
実施学級 第1学年1組30名（男13名，女17名）
実施場所 第1学年1組教室

1 単元名

Lesson6 My family （『NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 1』三省堂）

2 単元設定の理由

○単元観

本単元では、ブラウン先生が自分の家族について紹介をする。これまでは自分自身について自己紹介をしたり、会話をしている相手について質問したりすることが主であったが、本単元においては、第三者について説明をしたり、質問をしたりする場面が描かれている。家族の紹介をする中で、ブラウン先生の出身地であるイギリスや、クリケットや音楽祭などのイギリスで有名な文化についても触れられており、生徒の興味をひくとともに海外に向けての視野を広げる内容となっている。本題材をきっかけに、友人や家族を紹介することができるような表現力を身に付けさせると同時に、海外の文化に触れつつ自国の文化を客観的に見る機会も与えたい。

言語材料としては、3人称単数現在形の肯定文、疑問文及び否定文などを新しく学習する。社会のグローバル化が進み、人と人のつながりがよりいっそう重要になる現代において、第三者について紹介をし、人同士の掛け橋となるような表現力を身に付けることは大変意義深い。

○生徒観

本クラスは、教師の話をよく聞いて真面目に授業に臨む生徒が多く、予習や小テストなど各自が取り組むべき課題等もしっかりとこなす。また、ペアで行う音読活動等にも友人同士で協力して積極的に参加しようとする姿勢が見られる。しかし、英語で一から文章を作ることや英語で聞かれたことに英語で返答することが苦手なようである。11月に行ったアンケートで「4技能のうちどの技能が最も苦手か」と問うたところ、「話す力」「書く力」のいずれかを答えた生徒は全体の78%であった。これらのことから、生徒が英語を書くこと、話すことに対する苦手意識を払拭できるような活動を行うことが効果的である。そこで、本単元では、英語でインタビュー活動を行い、その情報を英語で書いて他者に紹介する学級新聞作りを取り入れたい。苦手意識がとれるよう、事前にある程度準備を行った段階で活動を行う。また、新聞のテーマを日常生活に関連した「朝食」に絞ることで、生徒の興味関心をひき、積極的なコミュニケーションが促進されることを期待する。

○指導観

本単元では、ALTのダリエン先生からの要望を受けて、クラスメートを紹介する学級新聞を3人称単数現在形を正しく用いて作成することを到達目標とする。そのためにもまず、ALTの友人紹介を聞かせ、本単元における目指すべき姿を確認させる。次に、教科書の本文を読ませ、ブラウン先生の家族紹介を理解させる。ここでは、新出となる3単現の肯定文・疑問文・否定文について丁寧に説明をする。そして、ブラウン先生の家族紹介についての要約文を書かせる。また、インタビュー活動に慣れさせるために、クラスメートにどのようなフルーツが好きであるのかを問う活動を行う。ここでは、10人にインタビューをさせ、その結果を3単現を用いて表現させる。最後に、クラスメートにインタビューをし、朝食に関する学級新聞作りを行う。インタビュー活動の前時に、世界各国でどのような朝食が食べられているかを英語で聞かせ、我が国における朝食と比較させることで、文化に対する視野を広げさせると同時に、自国の文化についても理解させる。また、自分が普段何を食べているのかを英語で表現させる。そして、インタビュー活動を行う。インタビュー活動自体は2回目になるため、ここでは、アイコンタクトやあいづち表現を意識させ、自然なコミュニケーションを目指す。また、タブレットを用いて完成した英文を共有させることで、ミスを減らし、正しい文章を書く表現力を高めさせる。

3 単元指導目標（到達目標）

- ・新聞記事をつくるためのインタビューをアイコンタクトやあいづち表現に気を付けて積極的に行おうとしている。
【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
- ・友達にインタビューして、新聞記事となる他己紹介文を3人称単数現在形を正しく用いて書くことができる。
【外国語表現の能力】
- ・本文を読み、ブラウン先生の家族についての要約文を完成させることができる。
【外国語理解の能力】
- ・完成した学級新聞を読んで、友達の朝食について正確にまとめたり、質問文を作ったりすることができる。
【言語や文化に対する知識・理解】

4 指導計画と評価計画

次	学習目標 学習内容・指導	評価方法			
		関心・意欲・態度	表現	理解	知識・理解 方法
1	めあて 家族や友人を紹介する表現を知ろう。				
	1 ALTの友人紹介を聞く・3単現の導入	○		○	ワークシート・様相観察
2	めあて 教科書を読み、ブラウン先生の家族について要約文を作ろう。				
	1 ブラウン先生が両親を紹介している場面を読む			○	ワークシート
	2 どんなフルーツが好きかについてインタビューする	○			様相観察・ワークシート
	3 ブラウン先生が弟を紹介している場面を読む			○	ワークシート
	4 ブラウン先生が妹を紹介している場面を読む			○	ワークシート
	5 ブラウン先生の家族についての要約文を書く		○		○ ワークシート
3	めあて クラスメートにインタビューし、朝食についての学級新聞を作成しよう。				
	1 世界各国の朝食を知り、自分（自国）の朝食と比較する			○	○ 様相観察・ワークシート
	2 友達にインタビューをし、新聞記事を作成する（本時）	○	○		タブレット・様相観察
	3 完成した学級新聞を読み、考えたことをまとめる		○		○ タブレット・様相観察

5 評価基準表（ルーブリック）

	C	B	A
【コミュニケーションの関心・意欲・態度】	インタビューを行う際に、ワークシートを見て、相手の顔を見ずにコミュニケーションをとっている。あいづちも使わず、ワークシートを読むだけになっている。	インタビューを行う際に、ワークシートを見ながらも、アイコンタクトを意識し、あいづち表現を1回はできている。	インタビューを行う際に、ワークシートを見ずに、アイコンタクトを常にし、場面に応じたあいづち表現を相手からの発言の度に行うことができている。
【外国語表現の能力】	3人称単数現在形を用いて、他己紹介文を書く際に、一般動詞にSを付けていなかったり、付け方が誤っていたりしている。また文章も2文以下で、相手に意味が伝わらない文章がある。	3人称単数現在形を用いて、多少のミスはあっても、他己紹介文を3文書いている。その際、主語+動詞で書き、相手に意味の伝わる文章になっている。	3人称単数現在形を用いて、誤りがなく他己紹介文を3文書くことができている。その際、主語+動詞で書き、相手に意味の伝わる文章になっている。
【外国語理解の能力】	3人称単数現在形が用いられた本文を読み、ブラウン先生の家族について名前や家族構成など簡単な事柄が理解できる。本文の要約文の穴埋めを3～5割完成させることができる。	3人称単数現在形が用いられた本文を読み、ブラウン先生の家族紹介について名前や家族構成、その家族が好きなものについて理解できる。本文の要約文の穴埋めを6～8割完成させることができる。	3人称単数現在形が用いられた本文を読み、ブラウン先生の家族紹介について基本的な事項だけでなく、家族が好きなものや家族の詳しい特徴について理解できる。本文の要約文の穴埋めを9～10割完成させることができる。

<p>展 開</p>	<p>Uh-huh. / 同意する Me too. / Oh, yes. 驚きを示す Really?! / Wow! / 喜びを示す Cool! / Great! / Nice! 切り返す How about you? 聞き返す Pardon?</p> <p>4 事前に設定しておいた2つの質問をペアで聞き合う。その結果を他己紹介文としてタブレットに書き、授業支援ソフトの機能を使って全体に共有する。 ・三人称単数現在形 Do you eat breakfast every day? -- ~ eats breakfast every day. ~ doesn't eat breakfast every day. Which do you eat for breakfast, rice or bread? -- ~ eats rice. ~ eats bread.</p> <p>5 各自で事前に考えていた朝食に関する質問をもう一つ、ペアでインタビューし、再び授業支援ソフトで全体に共有する。 What do you drink every morning? What do you eat for breakfast? What time do you eat breakfast? What fruit do you eat every morning?</p> <p>6 質問して完成した3つの文章をまとめ、授業支援ソフトの機能を使って提出し、発表する。 ~ eats breakfast every day. She eats bread for breakfast. She drinks orange juice.</p>	<p>際にどのようなあいづちが適しているかを考えさせることで、場面に合わせて、あいづちができるようにさせる。 Ex. あなたも目玉焼きが好きなら? A: What food do you like? B: I like fried egg. A: ()</p> <p>○授業支援ソフトでカードを作り提出させる。インタビューの答えにより、カードの色を変えさせ、クラスの統計がすぐに分かるようにすることで、生徒の興味を引き出す。</p> <p>○間違い等があれば、その場で訂正し、共通するミスを減らす。</p> <p>○分からない言葉は辞書等を使って表現するように伝える。</p> <p>○3単現のsの発音が正確にできているかどうかに注意する。</p>	<p>① ② ③</p> <p>① ②</p> <p>②</p>	<p>13分</p> <p>11分</p> <p>6分</p>	<p>ペア ↓ 一斉</p> <p>ペア ↓ 一斉</p> <p>個 ↓ 一斉</p>	<p>○インタビューをアイコンタクトやあいづち表現に気を付けて積極的に行おうとしている。 【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】</p> <p>○3単現を用いて他己紹介文を正確に書くことができているかどうか。 【外国語表現の能力】</p>
<p>まとめ</p>	<p>7 振り返りをワークシートにし、教師の話聞く。 ・アイコンタクト ・あいづち表現</p>	<p>○次回は完成した新聞記事を読み、感じたことや考えたことを共有することを伝え、次時につなげる。</p>	<p>②</p>	<p>3分</p>	<p>個 ↓ 一斉</p>	

国語科 学習指導案

学校名 福岡県立輝翔館中等教育学校
指導者 職名 教諭 氏名 大田 礼史
実施日時 令和元年 十二月十三日 金曜日 三時限目
実施学級 第四学年一組 三十九名(男二十二名 女十七名)
実施場所 第四学年一組 教室

1 単元名

『寓話―三篇』

2 単元設定の理由

○単元観

本単元では、著名な寓話三点を扱い、それらの教材の的確な読解を通して「言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる」という高等学校学習指導要領国語総合の目標に近づくことをねらっている。具体的には、本文に書かれてあるたとえ話を参考に、書き手の真意を読み取ることで、漢文に対する関心を高めることを目標としている。

本教材は、春秋・戦国の激動の時代を背景として盛行した寓話を通して、鋭い人間観や社会に対する洞察力が表現されている。これらは学問の論争や政治の折衝の中で、生き生きとした説得力にあふれる表現性を生み出し、現在の我々の生活にも幅広い分野で根付いている。本教材は、それぞれが短くまとまり、内容はどれも示唆に富んだものである。漢文読解の要領を学習させるのに適している。また、教訓を裏付ける巧みな喩えを用いた表現であるため、書き手(話し手)の真意を捉えることが難しくない。よって、この教材は本単元のねらいを達成するために適した教材であるといえる。

○生徒観

本クラスは漢文の学習に取り組む姿勢は前向きであり、求められれば発言することもできる。また、教師の指示も通りやすく、授業をテンポよく進めることができる。しかし、音読や書き下し文など、漢文読解の基礎が定着していない生徒がいるため、授業の導入に時間がかかる。内容が理解できれば積極的に授業に参加するが、難しい問題に出会うと諦めてしまう生徒もいるため、班活動を行い、わからない所は周囲に聞ける環境を作って授業を行っている。さらに、国語総合全般において、本文の記述をもとに書き手の主張や考えを読み取り、それを自分の言葉でまとめることを苦手としている生徒が大半である。そのため、本単元では、漢文の基礎を定着させるとともに、書き手の真意を読み取る力を身に付けることを目標に設定した。

○指導観

本単元の指導にあたっては、本文に書かれてあるたとえ話を参考に、書き手の真意を読み取ることで、漢文に対する関心を高めることを目標としている。そのためにまず、音読活動を取り入れ、漢字の読みや読む順番などを確認する。次に、書き下し文に直し、現代語訳を行う。これは内容理解に欠かせないものであり、漢字の用法や句法についての理解を促す。さらに、本文の内容を整理し、たとえ話が意味するものを考える。それぞれの文章において何が何をたどっているのかを明確にすることで、内容の理解につながる。最後に、書き手の真意を読み取り、それと実生活とを関連付けることで、故事成語の意義を述べる活動を行う。全活動を通して、主体的・対話的な深い学びの実践を図るために、少人数による話し合う活動を積極的に取り入れる。

3 単元指導目標(到達目標)

○漢字の用法や句法、漢文の構造を正しく理解し、現代語訳することができる。

【知識・技能】 【読む能力】

○文章に表現された内容を的確に理解し、書き手の真意を読み取ることができる。 【読む能力】
○実生活と関連付けて、漢文を学ぶ意義について述べることができる。 【話す能力】

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学習に取り組む態度
<p>○訓読の決まりを理解する。 【伝統的な言語文化に関する事項 イ】 ○古典の作品や文章の種類とその特徴について理解する。 【言葉の特徴や使い方に 関する事項 イ】</p>	<p>○文章に描かれた人物、心情などを表現に即して読み取る。【読むこと ウ】 ○文章の構成や展開を確かめ、書き手の意図を捉える。 【読むこと エ】</p>	<p>○漢文に用いられている漢字の意味や用法を理解し、漢文特有の表現に注意して内容を的確に捉えようとしている。 ○故事成語が今を生きる我々の生活態度や行動を戒める教訓になっていることに気づく。</p>

指導計画（単元の配当時間）

第一次 「借虎威」の内容読解 二時間

1 音読、現代語訳、内容理解①

第二次 「漁夫の利」の内容読解 二時間

1 音読、現代語訳、内容理解①

2 内容理解②、書き手の真意を捉える。

第三次 「塞翁馬」の内容読解 二時間

1 音読、現代語訳、内容理解①

2 内容理解②、書き手の真意を捉える。 本時（六／六）

5 本時

(一) 本時の指導目標（到達目標）

○初見の文に訓点をつけ、現代語訳することを通して、寓話の真意をまとめることができる。
（言語についての知識・理解・技能）（読む能力）

(二) 本時の手立て

○漢文の構造や基礎知識が定着しているかを図るため、初見の文を提示する。

○理解の共有を図るため、班活動を取り入れる。

○寓話をはじめとする漢文を学ぶ意義を述べるために、寓話と自己との関連付けを行う。

(三) 本時の授業仮説

寓話に込められた書き手の真意を的確に捉える学習において、真意を理解したうえで実生活との関連付けを行うことで、漢文を学ぶ意義について述べることができ、漢文への関心が高まる生徒が育つであろう。

(四) 教材

〈教師・生徒共通〉

○教科書（東京書籍『精選国語総合』）

○参考書（尚文出版『精選漢文』）

○学習プリント

(五) 本時展開

	<p>学習内容・活動</p>	<p>教師の支援 指導上の留意点</p>	<p>教材</p>	<p>配時</p>	<p>形態</p>	<p>評価</p>
<p>導入</p>	<p>1 前時までの振り返りを行い、本時の目標を確認する。 ○「借虎威」「漁夫之利」に込められた意味を確認する。 目標「①塞翁馬に込められた意味を理解する。②漢文を学ぶ意義について自分の考えを述べる。」</p>	<p>○「寓話」には、たとえ話を通して、書き手が伝えたい内容が示してあることを確認する。</p>		<p>6</p>	<p>全体</p>	
<p>展開 1</p>	<p>2 書き手の意図が込められた一文(白文)に訓点を施し、現代語訳する。 ○漢文の構造と本文の内容を踏まえて、訓点を施し、現代語訳をつくる。</p>	<p>○訓点を打つ際には、「精選漢文」を活用し、漢文の構造(主語・述語・目的語・補語)についてヒントを得ながら行うと良いことを伝える。 ○漢字の意味はスライドで随時ヒントを与える。 ○活動2でつくった現代語訳を参考に、「塞翁馬を通して書き手が伝えたいこと」を、自分の言葉でまとめる。</p>	<p>教科書・学習プリント</p>	<p>15</p>	<p>全体 ← 班 ← 個</p>	<p>○初見の白文に正しく訓点をつけ、現代語訳ができてくる。(言語についての知識・理解・技能) 学習プリント 78</p>
<p>展開 2</p>	<p>3 寓話に込められた意図を自分の言葉でまとめる。 ○現代語訳を参考に、自分の言葉でまとめる。 4 自己との関連付けをする。 ○「塞翁馬」の真意を捉えるなかで、自分自身について思い出したり考えたりしたことをまとめる。</p>	<p>○考えられない生徒へは「吉凶・禍福は予測できない」との例を挙げるよう促す。</p>		<p>6</p>	<p>全体 ← 班 ← 個</p>	
<p>まとめ</p>	<p>5 漢文を学ぶ意義をまとめ、発表する。 ○寓話をはじめとする漢文を学ぶのはなぜか。「という問いに対する答えをまとめ、班の仲間に発表する。」</p>	<p>○「借虎威」「漁夫之利」「塞翁馬」などの故事成語が、今を生きる我々に与える影響や、人として大切とされる価値観の普遍性などの視点からまとめる。</p>		<p>3</p>	<p>全体 ← 班 ← 個</p>	<p>○実生活と関連付けて、漢文を学ぶ意義を述べることができる。(話す能力)</p>